

皮心伝心

1人で診ない皮膚科診療

皮膚科診療の醍醐味は、目で皮疹が見えるところです。ベテランの先生の豊富な経験による神がかった診断に溜飲が下がることは何度もありますが、若い先生の新鮮な視点に驚かされることもよくあります。目で見える皮膚症状は、改善していなければ患者はごまかせませんので、この点も皮膚科診療の特徴です。それでも次の患者が待合室に控えています、どうしましょう？ なんとかなります。治療を変更して次回再診、他疾患の合併も考えられるので他科依頼、別の医療機関に紹介する…etc. アトピー性皮膚炎や乾癬など慢性難治性の皮膚疾患にも次々と新しい治療法が出てきており、なんとかなる手段は増えてきています。

自分で思うような皮膚科診療ができなくても、次の患者の診察になればリセットできます。「皮疹のある患者が診察室からいなくなることで、皮膚疾患がなくなったと錯覚してしまう」ことは、「目で見える」皮膚科医だからこそあるのではないのでしょうか。多少なりとも経験を積んで診察のペース配分ができるようになるにつれ、錯覚してしまうことはあるのでは？ と自分でもふと思います。目で見える皮膚科診療のトライandエラーは皮膚科医である限り続くのでしょうか。

タイミングよく、この数年で当施設も日本皮膚科学会の主研修施設、日本専門医機構基幹施設となり、教育施設として若い皮膚科の先生に皮膚科学の面白さを伝えるべく奮闘しています。それでも医療情報がスマホ等で簡単に調べられる時代になり、患者だけでなく研修医も私自身もごまかされてしまうことがあります。AIの進歩で皮膚疾患の診断が向上している中で、いかに人間である皮膚科医が錯覚しないで診療できるか？ 1人で診断、治療のできる皮膚科診療だからこそ、自分だけではない皮膚科診療を心がけることが重要なのではないのでしょうか。優秀な研修医が初診でしっかり所見をとり、きれいな臨床写真撮影と完璧な鑑別診断を行いました。が、「カンファレンスで検討」という結論で診察を終えたということを聞いて少し残念に思いました。近くにいる(いなくとも)上級医、同僚を呼んで一緒に診ようよ！ なんとかなる時代だからこそ、「1人で診ない」皮膚科医療を心掛けたい、伝えたいと思います。最近当院ではオープンカンファレンスと称して、院外の先生方に自由に各診療科のカンファレンスに参加してもらう制度ができました。皮膚科に限らず「別の視点を持った」先生に来ていただけないかと楽しみにしています。

樋口 哲也

(東邦大学医療センター佐倉病院皮膚科教授)